

# 芥川だより

発行日\*\*\*2019年3月1日 e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

梵

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*



## どうして投票率が低いのか？

投票日の朝、たまたま家にいた娘に投票に行くかと尋ねると返事がない。家内は行かないと言うからあきらめてせめて娘だけでも誘おうと「千円やるから行へんか」とエサをまく。「ほんまにくれるん！」と言いながらももっと値を吊り上げたいような気配だ。

しぶしぶながら付き合ってくれた娘を連れて投票所に行く途中で「初めての投票やわ」と娘が笑う。娘が言うには、ようわからんから投票に行く気がしなかったそうである。政治に関心は無いし、なんもエエこともないし派遣で働いている店の店長が嫌いでも早く転勤することを願っているみたいだ。「誰に投票するん？」と娘が言ううから「誰でも好きな人に入れたらええやんか」と私は呆れながら言った。

娘は「憲法のこと、原発のこと難しくてようわからん、私らみたいに勉強嫌いには難しすぎる」と感じてるみたいだ。大人も若い人も娘のように思っている人が多いに違いない。娘はその後投票には行ってないらしい。もし、二度目に誘ったら千円ではすみそうにないから誘うのをやめている。

政治は税金で集めた金の分捕り合戦である。予算をどう配分するかの戦いなのだ。選挙で多数を取れば合法的に税金を好きに使えるシステムが民主主義と言えるかもしれない。一票の価値を年間予算の100兆円を有権者1億人で割れば100万円である。衆議院は4年、参議院は6年だから400万円と600万円になる。年金運用等も含めればもっと大きな金額になる。

娘にやった千円は選挙違反かもしれないが、投票しなかった損失に比べればしれた額だ。みすみす100兆円に分取り合戦を傍観しているのは、なんとももったいない気がする。政治は難しいものではない。国民から無理やり集めた税金をどう配分するかという簡単なゲームなのだ。娘よ！わからんかー。

## 死をめぐるあれやこれ(54)

石川 吾郎

NHK政治ニュースは信じられるか？

戦後最長の「イザナギ景気」を超えたNHKも宣伝してきた「好景気」が、統計操作によるものだという疑いが濃厚で、その操作された統計の上でさえ最近三ヶ月下方修正が必要となり、アベノミクスの破綻は誰の目にも明らかになった。国民の生活は実質賃金の低下で一層苦しくなっているのに消費税増税へと突き進む安倍政権。これがいつまでも倒れないのはなぜか。理由はいくつもあるだろうがNHKニュースの罪は大きい、とつくづく思う。

●国会ニュースをトップで扱わない。●国会議論を取り上げて、政権に打撃になる批判は無視する、安倍や菅など政権側の言い訳的な答弁を最後に流す、など巧妙な印象操作を行う。●しばしばどうでもいい話題をトップにして、重大な政治ニュースを後にしてその印象を希薄にする。●キヤスターはほぼ全く政権批判をしない。というのがNHK政治ニュースのやり口だ。

実際に三月一日の衆院本会議、根本厚労大臣不信任議案の説明演説をする立民・小川淳也議員をただ時間潰しで採決を引き延ばしている印象を与える悪意ある編集をして、小川議員の充実した演説内容を実質伝えぬ形で、ニュースウオッチ9で放送した(この問題について上西充子法政大教授が抗議している。詳しくはネット「ハーバービジネスオンライン 小川淳也」で検索)。またNHKは森友のスクープを最初に記事にした相沢記者をNHKは記者から外し、結果相沢氏は辞職をした。

良心的なドラマやドキュメンタリを作るからといってNHKのニュースが信頼できる訳ではないことを国民は知るべきだ。特に政治ニュースには、視聴者は洗脳されない構えが必要だろう。NHKが安倍政権を支えている。

参議院で小西議員が安倍氏に「法治主義の対義語は何か」と質問したところ、安倍首相は答えられず話しをそらした。小西議員は「その答えは人治主義」とすかさず述べた。「人治主義」がすぐ「独裁」政治につながることは常識。安倍首相は義務教育でも出てくる基本的な政治用語も知らずに、政治権力を乱用して、この国を破壊し続けている。一刻も早く政治の場から引きずり降ろす必要がある。今年七月の参院選挙はこの絶好のチャンスであり、最後のチャンスになるかもしれない。



芥川だより一四六号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 60	坂本一光	2
哲字爺いの時事放談 10	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 22	下村嘉明	7
大人の今昔物語 54	石川吾郎	8
B級サラリーマン渡世譚 68	明石幸次郎	9
オクラの山たより 30	因了生	10
我がおくのほそ道の旅 24	成瀬和之	13
隠された歴史 5	満田正賢	14
孫ワオツチング	福田圭	16
編集後記	嘉	16
ふみの道草 2	山椒魚	16
俳句	土田裕 影山武司	16

素老人☆よもだ帳 (60)

坂本 一光

◆花を持って、会いにゆく

「わたしたちは、いわば、二回この世に生まれる。一回目は存在するために、二回目は生きるために」(ルソー著、今野一雄訳、『エミール(中)』、5頁、岩波文庫、一九六六年)、という。二回目は、別の言い方をすれば、「人間はいつ自分になるか」に関わる。そう問いかけた哲学者は、自分になるとは「社会の中の自分の位置に気づき、社会に向かって働きかける方向を決める」ことであり、人間は人と社会との関わりの中で「自分」になる、そのとき「人が生まれる」と言っている(鶴見俊輔、『人が生まれる―五人の日本人の肖像』、筑摩書房、一九七二年)。人が二度生まれるなら、同じ意味で、人は二度死ぬであろう。一度目は生物学的な死によって、存在しなくなったとき。二度目は、いわば、社会的な死。人と社会の中に存在し、一人の人間として生きたことを誰もが忘れてしまったときである。あらためてそういうことを思う詩に出合った。長田 弘の『花を持って、会いにゆく』という詩である。

花を持って、会いにゆく

長田 弘

春の日、あなたに会いにゆく。

あなたは、なくなった人である。どこにもいない人である。

どこにもいない人に会いにゆく。きれいな水と、きれいな花を、手に持って。

どこにもいない？

違うと、なくなった人は言う。どこにもいないのではない。

どこにもゆかないのだ。

いつも、ここにいます。

歩くことは、しなくなった。

歩くことをやめて、

はじめて知ったことがある。

歩くことは、ここではないどこかへ、

遠いどこかへ、遠くへ、遠くへ、

どんだんゆくことだと、そう思っていた。

そうでないということに気づいたのは、

死んでからだだった。もう、

どこへもゆかないし、

どんな遠くへもゆくことはない。

そうと知ったときに、

じぶんの、いま、いる、

ここが、じぶんのゆきついた、

いちばん遠い場所であることに気が

## 哲学者の時事放談 (10)

祖蔵 哲

づいた。  
この世から一番遠い場所が、  
ほんとうは、この世に、

いちばん近い場所だということに  
生きるとは、年をとるということだ。  
死んだら、年をとらないのだ。

十歳で死んだ  
人生で最初の友人は、  
いまでも十歳のままだ。

病に苦しんで  
なくなつた母は、  
死んで、また元気になつた。

死ではなく、その人が  
じぶんのなかにのこしていった  
たしかな記憶を、わたしは信じる。

ことばって、何だと思う？  
けつしてことばにできない思いが、  
ここにがあると指さすのが、ことばだ。

話すこともなかつた人とだつて、  
語らうことができると思つたのも、  
死んでからだつた。

春の木々の  
枝々が競いあつて、  
霞む空をつかもうとしている。

春の日、あなたに会いにゆく。  
きれいな水と、

きれいな花を、手に持つて。

この詩を収録した全集の結びに、詩人  
は書いている。

『詩集十八冊、詩篇四七一篇を一冊に  
収める『長田弘全詩集』を編んで気づい  
たことは、時代を異にし、それぞれまっ  
たくちがつて見えるそれぞれの詩集が、  
見えない根茎でたがいにつながり、むす  
ばれ、のびて、こうして一つの生き方の  
物語としての、全詩集という結実に至つ  
たのだという感懐でした。

詩を書くとは、一篇一篇の詩を書くこ  
とであるのと同時に、一冊の詩集にむか  
つて書くということ。そうした姿勢をつ  
らぬいてきて、初めての全詩集をつくる  
なかで実感したのは、魅惑がちからでな  
ければならないのが詩集という本なのだ  
ということでした。

目の前の日々の光景から思いがけない  
真髓を抽きだすのが、詩の魅惑です。こ  
の本がそのような魅惑をどこかしらに宿  
し、それがこの本を手にしていたたく  
方々の心に少しでも達することができれ  
ば、大きな空の下で、小さな詩を書きつ  
づけてきたものとしてうれしく思います  
『長田弘全詩集』、みすず書房、二〇〇  
五年。

私にも、春の日、きれいな水ときれい  
な花を持つて、会いにゆきたい人がいる。  
(かたちは心であり、心はかたちになる  
■大分の素老人)

## 印度旅行記(中編)

インド旅行記前編四日目(二月二四日)

のブツダガヤからベナレス(これも旧英  
語名、現在はワラーナシーと本来の名前  
になっている。)へバスで向かう場面から  
の続編。料金を通過して高速道路に入  
った。しかし、すぐに異変に気がついた。  
なぜか二車線の道路の片側にはこちらへ  
むかつて反対に走っている車に出会う。  
日本でいう逆走である。しかし、一台だ  
けではない。次から次へと堂々と走つて  
くる。そしてオートバイには三人も乗つ  
ている。いや四人もある。さらに自転  
車も高速道路を横断している。歩いてい  
る人も。もう頭が混乱する。このような  
中をバスは時速八〇キロほどのスピード  
で突進している。外の景色を見るのを止  
めた。見るから心配になるのだ。目をつ  
むつて眠るとにした。途中で夜店みたい  
な休憩所で暖かく甘いチャイを飲んでほ  
つとしながらの八時間。もうすつかり暗  
くなった夜の九時頃、ヒンズー教の聖地、  
ワラーナシーのホテルに到着し、すぐに  
遅い夕食を食べて、就寝した。明日は明け  
方前に起きてガンジス河の沐浴を見るのだ。

(1) ヒンドゥー教聖地ガンジス河の朝日

インド五日目、早朝も早朝3時に起床、  
直ぐにバスに乗り一〇分程走つてガンジ  
ス河に通じる細道の道路でまで行く。バ

スを降りてまだ暗い道を歩いていくとだ  
んだんと両側に賑やかな店が増えてきて、  
人も大勢になった。先の明るいとところへ  
出るとそこにはガンジス河が広がってい  
た。河岸は広い石階になっている。ここ  
ガンジス河がヒンドゥー教の聖地とされ  
るのはその河川崇拜による。特にこのガ  
ンジス河の水そのものがヒンドゥー三神  
の一人である宇宙創造者であり同時に破  
壊者であるシヴァ神の身体を伝つて流  
れ出て来た聖水とされ、河自体の名も女  
神ガンガーであるため「母なる河ガンジ  
ス」として河川崇拜の中心となつている。  
そしてガンジス河添いには沐浴場(ガ  
ート)が設けられた聖地が点在する。その  
最大のガートに来ている。たくさんの人  
が押すな押すなで沐浴している。流れる  
水は想像どおり汚い。しかし、意外とい  
やな匂いがしない。聞くと、この流れの  
源は遠くヒマラヤ山脈に抱かれた氷、ミ  
ネラル分が多いからその水は腐らないそ  
うだ。聖地巡礼者の多くは水を故郷に持  
つて帰るための真鍮製の容器(ジャリ)  
が売られている。私もそれに水を汲み日  
本に持つて帰った。果たして腐っている  
のか、はてまた蒸発してなくなっている  
のか未だ確認していないが。

さて、ガートからはガンジス河下りな  
らぬ河巡りボートが出ている。手漕ぎの  
八人ぐらい乗りのボートに乗り、岸を離  
れるとすぐに向こう岸のはるか地平線か  
ら朝日が昇ってきた。朝霧に煙るガンジ

スの河岸と赤い太陽、後ろを振り返ると大勢の沐浴する人が朝日に向かって手を合わせている。映画の一シーンのようである。ボートは河沿いを上りはじめ、岸には相変わらず大勢の人々がいる。洗濯をしている人もいればお祈りをしている人もいる。そして聖地を訪れる人々のための宿であるたくさんの小さなホテルが点在する。ボートが河を折り返し下り出して先ほど買ったジャリに水を汲んでしばらくすると河岸に煙りが見えた。

河岸の火葬場である。遺族が運んできた遺体はここで燃やされる。そしてその遺体は河に流される。以前からこのような話は聞いていたが、このように沐浴する人の隣で火葬し、遺体その河に流されるとは、まさに生と死が隣り合わせにいる。しかし、ここで火葬される人々はまだ上級クラスだという。燃やす楨代には一万円以上かかるとか、そんな高額は払えない人が大半。地獄の沙汰も金次第は世界共通か。

ヒンドゥーという言葉は西欧で作られた用語である。語源は、サンスクリット語でインダス河に対岸に住む人々という意味らしい。それがインドと発音されるようになった。そしてこれがインド宗教として呼ばれるようになった成立経緯はこうだ。紀元前二〇〇〇年頃にアリア人がイランからカイバル峠を越えてインド北西部に侵入した。彼らは前一五〇〇年頃ヴェーダを成立させ、これに基づく

バラモン教を信仰した。バラモン教から聖典やカースト制度を引き継ぎ、土着の神々や崇拜様式を吸収しながら徐々に形成されてきた多神教がヒンドゥー教である。この成立経緯からしてヒンドゥー教は支配者アリア人の支配機構としての構造を本質的に持っている。原インド人南に追いやられた人々はドラヴィタ人と呼ばれるらしいが、それにしてもアリア人とはインダス文明を破壊した人種と考えられるが、なぜかその名は「高貴な人」という意味であり自称である。そもそもどこから来たのかがはっきりしない。かのヒトラーがアリア人種優性説を言い出してからおかしなことになってしまったが未だに解明されていないとか。

ところで話は飛ぶがこのアリア人が侵入してきたカイバル峠というのは一つのアジアで地政学的に重要な個所である。地図で見るとこの峠は西北インドから北部にあるパキスタンとその北上のアフガニスタンの国境を繋ぐような形で位置している。パキスタンは後述するがインド独立時に分離された国だから元はインドである。すなわちインド世界はヒマラヤ山脈、スレイマン山脈、大インド砂漠(ターール砂漠)などに囲まれた地域であり、外部からの侵入は容易ではない地域なのである。そして唯一の通路がこの峠である。古来、交通および軍事上の要衝として、重要な地点であり、前一五〇〇年頃のアリア人のインド侵入、アレクサン

ドロス大王のインド侵入、さらにイスラーム勢力のインド征服はこの峠を越えて行われた。また法顕や玄奘などがインドに入る際もこの峠を越えた。地形学ではインド亜大陸はゴンドワナ大陸の一部が分離したインドプレートが移動してユーラシアプレートに衝突してはじまった造山活動により、中生代末期から洪積世(五〇万年前)にかけて形成されてきたとされる。プレートが押しやられ結果があの世界最高峰のヒマラヤ山脈である。そしてそしてその自然の通路とも言うべきがカイバル峠ということにもなる。このインドの地形的特質、他の世界との出入り口が限定されているという事、このことが多分独特の文明を作り出したのである

う。入り難く、出難い。一度、侵入を許すとそれを飲み込み、飲み込まれる。なかなか出られないが、出るとそれは最初とは別のものになっている。インドの宗教、文化はそれを証明している。

さて、朝日もすっかり昇りきったところで、ボートは船着場に戻った。降りると周りでは何やらヒゲをそったり、髪の毛を剃ったりしている現場に出くわす。なんでこんなところに散髪屋があるのか不思議に思っていると、これは死者を送る者は身を清めるための儀式の一つだとか。再びバスに戻るまでの道は来たときよりもにぎやかで、勿論ここでは牛も同居、ヒンズー聖地の土産物屋がずらっと並び河の静寂とはまた別の世界

に戻ってきた。一旦ホテルに戻り朝食をとり再びバスに乗り30分くらいで仏教四大聖地の三番目サルナートに向かう。昨日3日目に訪ねたのが二番目の聖地ブツダ・ガヤで悟りを開いたお釈迦様は、その教えを人々に説くことを決意し、ワラーナシー郊外のサルナートに行ったのである。

(2) 仏教第二聖地サルナートで釈迦は何を説いたか。

このインド旅行の目的はやはり哲学であるが、そこは日本人として仏教を考えてみたい。ここインドという土地でどのようにして仏教が生まれそして消滅したか。宗教を哲学として考えることは歴史を通して可能である。インドの地政学の箇所でも述べたが、この地域に侵入してきたアリア民族が先住民を支配するために利用したのが「ヴェーダ」を聖典とするバラモン教である。現代のカースト制のもととなる肌の色で非アリア人を区別する身分制度であるヴァルナ制を持つ。それは自然、宇宙と個人が一体である(梵我一如)真理であり、それを知覚することによって輪廻の業から脱することができると言うウパニシャッド哲学を生むことになる。自然と人間の関係を考え、真理を問うことは哲学そのものでもある。逆にこのバラモン教の形式主義を批判しておこったのが仏教や後のヒンドゥー教でもある。

仏教は、前五世紀頃、ガウタマシッ

ダールタ(釈迦)が悟りを開いてブッダとなり、ガンジス河中流のマガダの地でその教えを人々に説いたことに始まり、次第にクシャトリアやヴァイシヤ層に広がっていった。その教えを信じた人々が出家し、サンガといわれる仏教教団をつくり、または在家信者も増えていった。

ブッダの死後、インド各地に広がり、特に前3世紀のマウリヤ朝のアショーカ王の保護のもとで全インドに広がった。仏教四大聖地といわれるのは、まず第一番聖地、釈迦生誕の地、ルンビニー。現在ここだけはインド領ではなくネパールにある。もともとインドは藩王国、つまり多数のマハラジャの支配していた地域の集合であり、その一族であつたらう。そして釈迦はお母さんの脇腹から生まれたということが伝えられているが、この話は多分にバラモン教の身分制度と関係があるようだ。バラモン教の聖職者(頭(口)から生まれ、次のクシャトリア(王侯貴族)脇、ヴァイシヤ(商人、農民、職人等)お腹、一番身分が低いとされるシュードラ(上の三階級に仕える奴隷階級)足の下という区分になる。しかしこの分類はあくまで支配民族であるアーリア人内の区別であり、アウトカーストは原インド・ドラヴィタ人となる。とすると、釈迦族は支配民族であるアーリア系ということになる。第二聖地が開いた地、ブッダガヤであり、第三がここサルナート。最後の第四がブッダ入滅の地クシ

ナガラ。釈迦は生まれ故郷へ帰ろうとしたのか道中で亡くなる。その死因が食中毒といわれているらしい。これとは違うが、私も旅の最後にはインドの辛い料理には体調を崩した。

ブッダガヤで悟りをひらいた釈迦は、最初誰にもそれを話す気はなかつたらしいが、梵天が降りてきて説得したらしい。しかしこの梵天は仏教より後で確立されたヒンドゥー教という三大神の一人創造神ブラフマーであるから、これは後付け説明理由の可能性が高い。かつての修行仲間五人に今までの快樂主義と苦行主義を否定する「中道」思想を話し、出家した原因である「生老病死」の世界観「四諦」を説明し、その世界観から自由になる方法「八正道」を説いた。これが「初転法輪」である。さらに臨終の地クシナガラでは最後の説法をし、自分の教えを守ってくれとこの弟子たちに頼んだ。しかしこれ以後が問題である。キリスト、孔子、ソクラテスなど偉大な人の教えはその書物として残っていない。だから後世、解釈が様々にされる。仏教も必要にせまられ仏典結集を何度か繰り返した。しかし、釈迦没後一〇〇年のアショカ王を頂点として分派を繰り返した。四世紀以降はヒンドゥー教に押されて次第に衰え、十一世紀のイスラーム教の本格的な浸透によって、寺院が焼かれるなどの排撃をうけることとなった。例外的にベングアル地方にあつたパーラ朝では、ナー

ランダー僧院が復興されるなど、なおも仏教が保護されていたが、十三世紀はじめにその滅亡と共に仏教はインドにおいてはほぼ消滅した。その間、小乗仏教としてはスリランカなど南部へ、大乘仏教としては中国、日本へ北伝した。その大乘仏教は本来に釈迦の仏教かという「大乘非仏説」などは現在でも論争的である。「仏教とはなにか」「宗教とは何か」につながる哲学的な問いである。

さて、現在のサルナートはインド政府によって整理され遺跡公園になっている。かつては鹿野苑と呼ばれた地域らしく、鹿が多くいたという。どおりで奈良公園には鹿がいるわけである。が、どう見渡してもここには鹿が一匹もない。聞くと放し飼いははされていなくて囲いの中にいるのだとか。これは奈良のほうがりジナルに近いと思う。さて、全体は遺跡公園の様子で仏教テーマパーク的な雰囲気である。真ん中に大きなおレンガ色で椀型の塔、ストゥーパがある。仏教を保護したというアショカ王が建てたのが最初というが、幾度も破壊されているという。近くにはアショカ王柱といるのがあり、無惨にも王柱は、折られている。柱の上部には、国章にもなっている四頭の獅子の彫刻が飾られてたが、現在は隣接する考古学博物館に所蔵されている。仏教寺院もある。しかし当然、日本のお寺とは異なる。日本は中華様式である。ではどこ様式か。それはスリラ

ンカ仏教様式である。そのムラガンダックテイー寺院は一九三六年スリランカの大菩提会が建立したものである。しかし中に入るとお釈迦様の生涯を描いた壁画がありそれは日本人画家が描いたものという。当時は日本仏教会もその建設に協力したのである。しかし、時は第二次世界大戦前、日本とアジアでは微妙な関係にあつた。どうもここでも宗教と政治、聖と俗の対比が現れる。

前日3日目のブッダガヤの施設内入館の時もそうだが、やたらにボディチェックが厳しい。ナイフ類はもちろん金属の長い棒は持ち込み不可である。日本でお寺の拝観にこんな検査が行われるのは聞いたことがない。なぜか。これがもう日本では忘れ去れているが二一三年のブッダガヤ爆弾テロ事件である。テロ攻撃の実行犯について、パキスタンの組織、またはミャンマーで仏教徒に弾圧されたイスラーム教団体といった見方がなされた。イスラームと仏教の対立はスリランカやタイにも存在しており、テロの動機としてはありえるとみなされた。ミャンマーのアルカイダ系組織のも容疑者とされた。事件の真相は明らかでないが、イギリスからインドが独立した以来の宗教と政治の対立が現在も引き続き存在しているということだ。

サルナート仏教テーマパークにはジャイナ教の寺院もあつた。ジャイナ教徒にとっては不殺生(アヒンサー)がもつと

も重要なことなので、道を歩くときも虫を殺さないようにほうきで道を掃きながら歩くという。「不殺生・嘘をつかない・盗みをしてはいけない・物を持たない」の五つがジャイナ教の基本らしく、同時期に成立した釈迦の仏教も相当な影響を受けているようだ。インド独立の英雄ガンジーの非暴力主義はここから出ている。寺院内には多くの絵があつたがどれも瞑想や自然と人間の一体感を描いており、「草木国土悉皆成仏」という釈迦入滅前後の事実記録である「涅槃経」を連想した。なにやら不思議な空間であつた。

そして先ほども触れた博物館。コロコタの博物館と同じく相当な数の展示物であるが日本と比べ無造作に置かれている。その入口にはアショーカ王の石柱が展示されている。柱頭には、四匹の獅子が彫られ、その足下に車輪が描かれている。この車輪は「法輪」(ダルマ・チャクラ)といわれ、仏の教えである真理と正義によつて世界がよく治まることを象徴している。現在のインド共和国の国旗の中央に描かれているのもこの法輪である。仏像もたくさん展示されたいた、歴史教科書にもあるガンダーラ様式である。中には頭部の欠けているものもあつた。偶像破壊の跡であろう。

すっかり仏教ムードになったテーマパークを後にもうすっかり慣れたインドカリー昼食をすませて、バスはワラーナシー空港に向かった。入ったときはバスだつたが出

るときは飛行機。次はインドに入国した地デリーへ戻る。インドの空港施設に入るのは他の公共施設と同じく検査が厳しい。もう慣れたはずだがイライラする。係官の横柄な態度は日本人からすれば我慢の限界である。しかし「郷に入れば郷に従え」である。一時間半ほどのフライトでデリー空港に到着してバスで今度はデリー市内に入る。デリーはかつては「ニューデリー」を呼んだが今は「デリー」。そうなのか。実際にはイギリス植民地での新デリーがニューデリーで旧市街がデリー。インド人はデリーとしか言わないが、外国人ニューデリーでも問題ないとか。ここらはおおらかだ。目的のホテルに到着すると周りがやたらに騒々しい。なにかお祭りでもあるのかと聞いてみるとどうやら結婚式が行われるらしい。本日の宿泊ホテルはもう行程の最後に近いために十分休養できる比較的高級なホテルだ。こんな高級なところで式を挙げられるのはインドの富裕階級だけだ。インドはご存知のように超階級社会。金持ちは日本との桁が違ふ。私ら旅行者も出席はウエルカムだという。お言葉に甘えて行つてみた。

しかし、入つてしばらくすると係の人が出て行つて欲しいという。なんだ話が違ふじやないか。どうも宗教の違いか。はっきりしないが御呼ばれには預かれなかつた。残念というところでレストランでおなじみのインド夕食をとり、長かった五日目を終えた。(3) イスラム都市デリー  
インド六日目は首都デリーから始まる。

首都であるこの都市は他とどこが違うのか。ガイドが言った。まず静かであると。喧噪の町、例えばコルコタでは車の警笛がやまみすぎる。しかし、インド人の説明では「どけ!」という威嚇の警笛ではなく、「私はここにいますよ」という確認の警笛だという。どう考えてもそのように聞こえないが。他の都市とあまり変わらないが少しはましぐらいである。そして、デリーで目立つのがイスラム建築である。

イスラム勢力は、八世紀におそらくはかのカイバル峠を通りインダス河下流域に及んできた。しかし、インドへの普及は他の地域のように迅速には行かなかつた。インドへのイスラム教の浸透は、民族宗教として定着しているヒンドゥー教、それとまだインドで勢力を保持していた仏教やジャイナ教などの先行する宗教と競合したからであつた。しかし、一二〇六年の奴隷王朝(奴隷・アラブ人以外の被支配階級出身)に始まるデリー＝スルタン朝(スルタン・イスラム国家)において宗教的権威であるカリフから、一定地域の世俗的権力を委託された者の称号)からインドでの拡大は始まり、一五二六年以来のムガル帝国(ムガル・イスラム教スンナ派のモンゴル国家まで、イスラム教は支配者の宗教であり、ムスリムが政府の要職を占める支配者階級を形成していった。しかし、全体的に見ればヒンドゥー教徒に対しては少数派であつた。少数と言つても現インドのイス

ラム教徒は全人口約十三億人のうち約一四パーセント一億八〇〇〇万人。日本の人口より多い。政治的な面で両者が対立することはあつたが、ムガル帝国の当初の宥和政策もあつて、民衆レベルではヒンドゥー教とイスラム教は共存し、それぞれの信仰に寛容であり、排除することとはなかつた。ムガル帝国が非ムスリム排除の姿勢を明確にするのは十七世紀後半のアウラングゼーブ帝以降のことである。この時にインドの仏教が完全に消滅したことは前にも話した。

このような歴史だからデリーにはイスラム建築が多いのだ。まず訪れたのは世界遺産「フマユーン廟」。この廟は多くの因縁を持つている。フマユーンはムガル帝国二代皇帝だ。かれは一時期衰退したムガル帝国を離れましたが、一五五五年にインドへ帰還を果たし、スール朝を打倒してムガル帝国を復活させた。しかしそのわずか半年後、彼は不幸にも階段から転落して頭を打ち、突然その一生を終えることとなった。悲しんだ妃ハミードはデリーを流れるヤムナー河のほとりに墓廟の建設を命じた。九年の歳月をかけて完成した墓廟はフマユーン廟と呼ばれ、インドにおけるイスラム文化の最高傑作と言われる有名な世界遺産タージ・マハルに多大な影響を与えた。およそ九〇年後の一六六三年に完成しと言われている。かのタージ・マハルは亡き妃のための墓。ヒンドゥー教では河に流したがイスラムではこのような豪華さである。だが

十九世紀末再びムガル帝国は衰退に向かう。イギリスの支配に対して反抗する人々がインド大反乱を起こした。この時イギリスに最高指導者として担ぎ出されたのが、最後の皇帝バハードウル・シヤー二世だが、すでに反乱軍をまとめ上げる力はなく、イギリス軍に敗れる。その皇帝が息子たちと一緒に逃げ込んだのが、このフマーン廟であつたという因縁である。

フマーン廟は上下二層構造になつており、基壇と呼ばれる正方形の土台に廟が載つているような造りだ。廟の四方にはイーワーンというイスラム特有のホールと門が設けられており、これらは四方どこから見ても同じように見えるよう設計されている。廟の建物の赤い部分は砂岩、白い部分は大理石でできており、組み合わされて幾何学模様のようになつています。庭園は水路で四つの正方形に正確に分割されており、木々が植えられている。水は砂漠文化で暮らす人々にとっては富の象徴で、大量の水を使うことで威容を誇つたというわけだ。こうした四分割された庭園はチャハールバグと呼ばれ、天上の楽園を地上に再現したものだ。これはそっくりタージ・マハル廟に受け継がれている。しかし、われわれ東方仏教徒にあつては、まず美という感覚の違い、や精神性との違いが大きく異なり、どうもしっくり来ない。まだヒンドゥー教寺院建築の方に親近感をもつ。イスラム独特の数学的形式主義、例えば対

称性や自然の模倣にその原因があるのであるか。一方で現世の実利を求める宗教と彼岸での救いを求める宗教観の違いか。

次に訪れたのは同じイスラム建築でも時代は相前後し、イスラム侵入初期の一〇〇年ごろに奴隷王朝の建国者であるアイバクによって、クワットウル・イスラーム・モスクに付属して建てられたクトゥブ・ミナール。ミナール（ミナレット）というのはモスクに付属する塔のことでこのその高さ二・五メートルは世界で最も高いそうだ。ヒンドゥー様式とイスラム様式が混在した様式となつている。ヒンドゥー教・ジャイナ教の寺院などを破壊し、その石材を転用して制作されたものであり、建築に携わつた職人もヒンドゥー教徒であつたと推測されている。よく見ると建築模様にはなぜかヒンドゥーの神々がはめ込まれている。混乱していたとはいへ相当な無理があるように思われた。

さて、この旅行も七分の六日目の午前を終わった。もうすぐ終わりが見えそうであるが、長大なインド史と広大な土地の描写にはたとえ七日間のわずかな見分であつても紙面が幾重あつても足りない。そうは言つても次号は最終稿、後編になる。ガンジーから再びイスラムへ。現代インドの政治問題にも入る。時事放談の面目である。（後編へつづく）

## 大峯奥駈道(22)

下村 嘉明

不思議にも私はこれまで何事につけ「なぜ」という懐疑的な考えが持つて生きてきた。どうして人は平和を求めながら戦争をするのか？自分はどうして思うような生き方が出来ないのか？なんと情けない人間なのか？…尽きることのない妄想の中で解決の糸口が見いだせなかつた。

大峯奥駈を知つたのは後輩の大江君の一言であつたが、次第に奥駈の世界に興味を惹かれ山岳信仰を体現する修験者の想いを理解してみたいと思うようになった。険しい峰々を歩き念仏を唱える行にどんな意味があるのか。単なる古からの遺物なのか等、考えがまとまらなかつたのだが、実際に釈迦が岳で出会つた修験者の一行から感じたものは目を追うことに大きくなり考えれば考えるほど自分の求めていたものと同じくし出して来た。

母が毎日唱えていた般若心経と大峯奥駈で聞いた般若心経が私の中で一つにつながり、何ともいへぬ安堵感と般若心経への興味を抱き始めた。

般若心経は短いお経であるが難解である。物事はすべて空であつて無常に流れる流動的だと説く。言われてみれば確かにそうである。自分も含めてすべてのものは原子が沢山集まつて出来ている。身の回りのものすべてが私を形作つている

原子で出来ている。石ころでも木でも同じ原子で出来ている。なんか不思議な感じだが事実だからしようがない。しかも、その形は刻々と変化しつづける。私自身を振り返つてみても、母と父の卵子と精子が受精し細胞分裂を繰り返して今の私がある。また脳神経が働かなくなつて死ねば細胞も分解されて原子に戻る。私だと思つているものの実態はつかみどころのないもので、しかも常に変化しつづける。悲しいとか苦しいとか思うのは自分が存在していると錯覚しているから思うので、本当は存在していないから悲しみも苦しみも何もない。

今の私が自分のものであるかのように思い込み執着するから苦しみが生まれてくる。いろいろな思い込みが私を苦しませ悲しませていただけなのだ。まあ妄想みたいなものである。しかし、私の頭の中は実に多くの思い込みが詰まつている。がんにがらめにへばりついたようによからぬ思い込みがぎっしりと詰まつている。長生きがよくて早死が不幸だなんて誰が決めた？金持ちがよくて貧乏が不幸だと誰が決めた？誰も決めてはいない私がそう思つているだけだ。すべて私の思い込みで自分の世界をつくり勝手に自分を苦しめているだけなんだ。なんと多くの悲しみや苦しみの種を自分がまき自分の首を絞め続けてきたことか。

苦しむ私の存在そのものの実体がないのだから苦しむ私も存在しない。思い込

## 大人の今昔物語 (54)

石川 吾郎

みという妄想で苦しんでいる。なんとバカバカしいことをやってきたことか。

宇宙はビックバンから始まったらしい。その爆発から生まれた宇宙のガスが集まって出来た星の一つが地球だ。数十億年もすれば膨張する太陽に飲み込まれる運命にあるとも言われる。地球が消えてしまえば、地球上のすべてのものは消えてしまう。無になるのである。無から生まれて無に帰る。

私が、思い込みで確かな存在と思っているものは全て無から生まれ無に帰る。目に見えない原子、その原子を作る陽子や中性子、これら極小の物質が電磁波と重力で集まったり離れたり爆発したりしながら宇宙空間をもの凄い速さで流れているらしい。その一瞬の姿が今の私であって、何光年という時間で考えれば取るに足らないアツという間の出来事であるろう。

宇宙そのものが、ものすごい速さで流れる空間で私が思い込んでいる時間などは取るに足らない想像を超えた世界なんだと。いや、いろいろと妄想する私自体に存在の実態がない訳だから、本当は何も無い。

よく考えれば、実は存在そのものが、有るように見えていたが、実は無い空なんだと。我流で般若心経を読み解いて私なりに空と無常を理解した気分になった。もう苦しむことはないんだと自分に言い聞かせた。

今回は中国の説話からです。第七巻は法華経の功德の話しを扱った巻です。女犯の話題ですので教科書に出ない度は四〇五。

僧、羅刹女らせつによのために混乱させられ、法

華経の力によって命が助かった話し (巻第七 第十五)

今は昔、中国のある周辺の国に一つの山寺があつた。その山寺に若い僧が住んでいた。常々法華経を上げていた。ある夕暮れ、寺を出て行脚をしていると、羅刹女に行き会つた。これは鬼がたちまち姿を女に変えたのだつた。その姿ははなはだ美しかった。

その女は僧に近寄り、誘つてきた。僧はたちまちその美しい姿に惑わされ、誘われるままに、この女鬼と契りを交わした。ことが終わり、この僧は惚けた状態になつてしまつた。

女鬼は「この僧を自分の住処に連れていき、そこで喰らつてやろう」と考え、僧を背負い空を飛んでいった。折りしも初夜の勤行の時刻(午後八時ごろ)に、一つの寺の上を飛びすぎた。鬼に背負われていく間に、この僧には寺からほかに法華経を誦する声が聞こえてきた。そ

の声に少し意識が戻り、かすかに正気が戻つてきた。僧は心の中で法華経を唱えた。

すると女鬼が背負つた僧は、たちまちの内に重くなり、女鬼は耐えきれず徐々に高度を下げ、ついに地面に下りてしまつた。女鬼はせんなく僧をそこに捨て去つていった。

僧は我に帰つたが、自分がどこから来たのかわからなかつた。呆然としていると、どこからか寺の鐘が鳴るのを聞こえてくる。この音の方向を指して歩いて行くと、一つの寺にたどりついた。門を叩く。門が開き修行僧に招き入れられると、僧はつぶさに事情を説明した。この寺の僧たち、これを聞くと「この人は、女犯の戒律を破つた者にはちがいない。我々は同席することはできない」と、僧を避け追い出そうとした。

おりしも一人の長老が姿を現し「この人は鬼神に惑わされただけであつて、女犯を犯したのは本心からではない。ましてや、法華経の功德を体現した方だ。それゆえ寺に留め住ませよ」と命じ、この僧には女鬼を犯した罪を懺悔させた。

この僧、もと住んでいた寺の有りさまを語つたが、そこから計算してみると二千里以上隔たつていることがわかつた。帰還するに術なく、この僧はたどり着いた寺に住みついたが、後になり元の寺の人が偶然来合せて、この事情を聞き、この僧を元の寺に帰し送つたのだという。

これを考えるに、法華経の靈験は不思議なものである。女鬼が、僧を喰らおうとして背負い二千里余りの距離を一時の間に飛んでいったが、僧が法華経を上げることによつて、たちまちの内に重くなり、捨てていったということは、驚くべき希有なことだと、語り伝えているところである。

《コメント》

僧が美女に惑わされて戒を犯す物語。しかもその美女の正体が人食い鬼とくれば、身の毛のよだつ思ひです。何か世間を象徴しているような、と感じるのは私だけでしょうか。しかも法華経とて読んだこともない身であれば・・・背負つた荷が急に重くなる、というプロットはわが国の昔話によく出てきますが、こういう話しとの関連が気になるところです。



担当者の役割 (21)

前任者として、明石を指導、サポートする係長の立場として、無責任と取られるM居の発言に対し、K田部長が「M居さん、この部署の中では、韓国を一番長くやり、人脈も築いていたと思っていたが、鄭さんから、不信任を持たれ、輸出部を無視して工場長に直接、納期督促を談判されるのは、窓口の営業としては問題ありと判断せざるを得ないよなあ。今週木曜日に明石さんを出張させて、交渉を引き続きやって貰おうとしているのに、最初から一五パーセント値上げでは、交渉にならないとはー。それであれば、代案を言わないと話が進まない。私は、一五パーセントの中味を腹を割って話し合い、その上で、お互い譲歩して一〇パーセントアップ位で結論を出そうという明石さんのストーリーで良いと思うがなあ！」と厳しい表情をして、M居の方を見ながら言った。

方から言っておくので」と言った後、「明石、この宇都宮工場の工務課長と管理課長宛の書面は何や？俺にハンコをつけと言う事か？」とぶつきら棒に問われた。

明石は「そうです。窓口担当の工務課のS沢さんから要求されてます。関係部署の実務担当者が動きやすくする為の書面ですので、お願いします」と答えると「まあ、お前は、この前まで工場に居たから、工場の人を動かすのは、お前がよく知っているから、これで動いてくれるのやったら、なんぼでも、ハンコをついで！工場は、口頭ではなく書面ですって、役所みたいところがあるなあ」と皮肉とも取れる言い方で、一応は納得してくれた。

通じて、直接、説得してもらおうための親書です。判を押して頂けますか？」と言おうと「中味を見せてくれるか？」と言われたので「分かりました。明日、書いてお見せします」と答えたら「直ぐに書いて見せてくれ！俺は、君が書くまで、飲みに行かないからなあ」と、何でも言ったら直ぐにやれと言うタイプの人らしく、顔は笑いながらも眼は笑っていないかった。

明石はその勢いで「分かりました。今から直ぐに書きます」と答えた。

「いいかなあ。これで打ち合わせは終わりにしようか？ S田専務の処に、明石さんで行ってくる。明石さんの韓国出張命令書にまだ、ハンコを付いてもらっていないそうやないか？ A杉課長、何か専務は言われていたのか？」とA杉に向かって言った。

「ああ、まあ、専務は転勤で工場から来たばかりの明石を韓国に出張させても大丈夫か？君が行けば良いではないかと心配されておられるようでしたわ」と応えると「よし、明石さん、今から専務に説明に行こう。それが終えてから、親書とやらを書いてくれ！」と言いながら、席を立ち先に打ち合わせ室を出て行った。

明石は最後に部屋を出ると、K田部長の後を追いかけて、専務室に向かった。

専務室に二人で入っていくと、S田専務は、大きな執務機の椅子から立ち上がり、応接のソファに二人を招いて座らせ、自分も向かいのソファに座った。

K田部長が「専務、この度、M居君の後任に明石君を就けましたが、先方の組み立て時期が近づき、価格交渉も決着をつけないといけないタイミングに来ています。その為、今週末曜日から韓国に行かせます。それで先程、交渉の打ち合わせをして、明石君が考えたストーリーで交渉させるように決めました。M商事と韓国の金さんにサポートを私の方から頼みますので、専務から、明日にでも、常務に電話していただき、韓国側の希望納期は必ず守り、かつ、それ以上の納期短縮に全力をあげているので価格改定を頼みます。その説明の為に、明石というM居の後任を出張させるので、宜しくと言っていただきませんか？先方も焦っているの、納期がどうなったのかと又、鄭さんから、宇都宮工場長に電話をされるかもしれませんので！」と言うと、S田専務は「K田部長が言われることは、分かりました。明石君、これも経験なので、交渉事は、押したり、引いたりしながら、しっかりとやって来てくれたまえ。鄭さんには、今から直ぐに電話しておきます。転勤早々、大変だと思いが、宜しく頼むよ。それと、K田部長、明石君の出張命令書です。捺印しておきましたので」と笑いながら話を終えて、K田部長に命令書を渡すと、直ぐに秘書の女性に電話をして、相手方指名(パーソンツーパーソン)で韓国D工業鄭常務に国際電話をかけるように指示をした。

困了生

困了生自選詞華集あれこれ (一)

一

先日、友人の快気祝いという名目で仲間内で痛飲する会が行われました。理由は何であれ酒を飲む会です。話題は病気にはじまり宗教にまで及びました。いわく「私は般若心経に目覚めた、いわく「いや新約聖書の四つの福音書を読んで感銘を覚えた」と。そういったことを語り合う年齢になったのですね。もつとも、こういつている筆者に宗教的な経験がまったくないわけではありません。

筆者は子どもの頃に数ヶ月に一度わが家で開かれた真宗の御講組で「帰命無量寿如来、南無不可思議光、法蔵菩薩因位時、在世自在王仏所」ではじまり「往生安楽国」で終わる「正信偈」をよく聞かされました。「正信偈」を読み上げる人の声の出しようも面白かったのですが、これを子どもが聞き続けるにはちよつと長すぎました。たいていは途中で意識がなくなり「おうおうじようじよう、あくんら

くくこくく(往生安楽国)。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」で目を覚ましていました。それでも中間あたりの「印度西天之論家」くらいまでは起きていたようで「いんどせせてん、ししるんげく」といふ言葉は覚えています。まったく意味など

はわかりませんでした。「ああ、もうすぐ来る、来る。」とワクワクしていました。というのも、この言葉にさしかかるとそれまで疲れた声で読んでいた読み手が突然トーンを変えて「いんどせせてん、ししるんげく」と声を張り上げ、グツと読むスピードをあげるものだからうつらうつらしていた人たちが一斉に頭を挙げるのです。半分は終わったぞ、と確認し合っているようでした。その姿を面白がっていたのかもしれない。

「正信偈」が終わると「御文」です。蓮如さんの文章を朗誦するのですが、やはり例の「朝に紅顔、夕べには白骨」がしっかりと記憶に残っています。「あしたにこくくがん、ゆうくべにはくく、はくくつこくつとなれくくりくく」と歌舞伎役者のように朗々と読み上げるのがおかしかったのでしょうか。

そうした昔の記憶があるせいででしょうか、宗教一般に格別の畏敬の念を持つということは今までありませんでした。そこへ友人たちの宗教談義です。筆者は黙って聞き流すほかなかったのですが、思えばすでに還暦をとうに過ぎた年齢になつたのですから、仏陀の説く「生・病・老・死」の四苦はほほ味わい尽くしてきたはず。宗教に目覚める時期になつてきているのかもしれない。

確かに、いまだ経験していない「死」はともかく「生」とくに「貧」、「病」、「老」についてはいろいろと筆者に限らず感ず

るところは皆さんそれぞれに多くあることでしょう。それは古今東西いずれの人も同じであつて、すでに過去の人となつた人たちと文字の上でそのことについて語り合うのも意味のないことではありませんまい。

今回、そうしたものをいくつか本棚の書から拾い出してみることにしました。ただし、筆者は俗なるものを好む性癖でありますので、紹介する言葉は必ずしも高尚なるものばかりとは言えず、読者が「えっ」と思われるものがあるかもしれませんので、その点はお許しください。

二

いつわりの ある世の中なり 神無月

貧乏神は 身を離れず

雄長老

まずは「貧」です。作者は安土桃山時代の禅僧でありながら狂歌師としても有名であった人です。この人は細川幽齋の伯父で建仁寺長老にまでなつたという人ですから当時最高の知識人といつてよいでしょう。他にも「君が代」をもじつて

君が顔 千代にひとたび 洗うらし

汚れ汚れて 苔のむすまで

というのがありますから、笑いのめす衝撃度もかなりの人です。

「いつわりの」の歌意は「嘘ばつかりの

世の中だね、神無月というのは神様がいないはずなんだけど、オレの周りからちつとも貧乏神が離れねえ」ですが、歌全体になんとなくユーモアが漂っており、窮迫の度合いはそれほど感じられません。京の五山の一つ建仁寺の最高責任者が貧困にあえいだなどは考えられませんが、まず世情一般の思いを書いたものといつてよいでしょう。

この雄長老は別として貧乏神に苦しめられた経験を持つ人は少なくないでしょう。特に「詩書、貧を救わず」と昔からいうように詩歌に携わる人の貧窮ぶりは目につきます。中でも特に貧しい詩人の代表といえばなんといつても杜甫でしょう。

彼は貧しい生活の中で幼な子を餓死させてしまいました。その時の思いは長詩「奉先県に赴くときの詠懐五百字」に書かれています。百行にも及ぶ長大な詩ですから、該当する部分だけを抜き出します。このとき杜甫は四十四歳。天宝十四年(七五五)、安祿山の乱の直前でした。長安に単身赴任していた杜甫は家族が疎開していた地に到着すると幼な子の死を知ります。

入門聞号咷

幼子飢已卒

吾寧捨一哀

里巷亦嗚咽

所愧為人父  
無食致天折  
豈知秋禾登  
貧窶有倉卒

門に入れば号咷を聞く

幼子飢えてすでに卒せしなり

吾なんぞ一哀をおしまんや

里巷もまた嗚咽す

愧ずる所は人の父となり

食なくして天折を致せしを

あに知らんや 秋禾は登れるに

貧窶には倉卒たることあるを

門に足を踏み入れると泣き叫ぶ声を聞いた。幼子がすでに餓死したためという。私はどうして嘆き悲しむことを惜しもうか。村人たちもまた咽び泣いてくれている。恥ずかしく思うのは人の子の父でありはがら食へ物がなくて幼子を飢え死にさせたこと。今年は秋の穀物の実りもよいと聞いて安心していたのだが、貧乏人には思わぬことが起るのだとは気がつきもしなかった。

中国の詩人の中では稀に見るほど家族愛の強かった杜甫です。詩は身を養うにはまったく役立つとはいえ、実生活での無能ぶりのゆえに我が子を餓死させてしまった杜甫の悲痛な思いが切々と伝わってきます。

杜甫と同じように窮迫の一生を送った維新期の詩人大沼枕山も長男夫婦を貧苦

の中で窮死させています。死が近くなっても枕山は「今むしろ餓死せんも、哀れみを儕輩に乞わざるなり」と言い放っていたといひます。「儕輩」とは「仲間、同輩」のこと。おのれの貧しきをもものでもない、その氣迫たるや壯とすべきではないが、やはり痛ましい限りです。詩書はついにその貧を救うことはなかったのです。

### 三

詩聖杜甫の窮迫ぶりに劣らず、貧窮に苦しむといえは俳聖の松尾芭蕉もかなりのものでした。次の句はどう解釈するか少し問題がありますが、「私は貧乏だからね、それで、いい句もできるんだよね。」という湿っぽさを感じさせない句で筆者の好きな作品です。

花にうき世 我が酒白く めし黒

(虚栗)

「季節は春。花見に浮かれている世間とちがひ、私は白い濁り酒を飲み、黒い玄米を食べている。なに、貧乏暮らしをしていながらこそ昔の詩人たちの心も分かるうというものさ。」という具合に芭蕉は強がっています。しかし、現実には彼の生活はなかなか大変でした。

芭蕉がこの句を作ったのは天和三年(一六八三)春のこと。前年の十二月に八百屋お七の放火の原因となる大火で芭

蕉庵が焼け、しばらく甲斐国の弟子を頼って行っており、江戸の弟子たちの努力で芭蕉庵が復興して帰ってきた直後の句です。

この句の前書には白居易の「憂へてはまさに酒の聖を知り、貧しては始めて銭神をさとる」という言葉がわざわざつけられています。憂さを晴らす酒、貧苦を救う銭の神(貧乏神の反対の神でしょうか)のありがたさを再確認した芭蕉の気持ち、風狂ぶって作った句と筆者は見ますが、どうでしょうか。

さらに、本当に貧乏な俳人といえは芭蕉の門人の中に極めつきの人がいます。なにしろ全国を放浪して物乞いをしていた本物のホームレスでしたから。その名を八十村路通といいます。近江大津の、それも三井寺の生まれらしいのですが、はつきりとはしません。乞食僧侶をしなから作った路通の代表作は

いねいねと 人にいはいれつ 年の暮れ

(猿蓑)

です。托鉢僧のように民家からお米やお金の施しを受けようとしていたのでしよう。しかし、忙しい師走の時期です。「やる米なんぞはない、あっちへ行け。いね(去ね去ね)」と追い払われた経験から生まれた句だと思われまます。

この路通を芭蕉は時に叱ったり許したりして、とてもかわいがっていたよ

うです。例の「奥の細道」では、最初、同行者として芭蕉は路通を予定していたほどですから。しかし、路通は品行が悪いと周囲からいわれ曾良に変更されました。門弟仲間としつくりといっているなかつたかもしれない。「路通はいづこの者とは知らず。其の姓名も知らず、其の性、不実軽薄云々」と門弟たちの残した記述を見ると彼らの路通を見る目は厳しかったように見受けられます。

路通の作でよく話題になるのは次の句です。

鳥共も 寝入てゐるか 余呉の海

(猿蓑)

湖北の鳥の姿に自分を重ねているのでしょうか。さびしい句です。

### 四

貧しいといえは幕末の公家も、その困窮ぶりはかなりのものであったらしく、次のような落書が江戸の市中に出回ったといひます。

まろ(鷹)もまだ

さしたる老いの 身ならねば

握りさえすりや じきに立つなり

(落書類纂)

これを見て「まあ、下品だわ!」と言われる方は自分こそ下品と猛省していただかなくてははいけません。先ほど言った

ようにこの一首はワイセツどころか、幕末の京都公家の貧乏苦を詠んだものだからです。

幕末、公家の貧窮ぶりにつけこんで金銭による幕府方の買収工作もしばしば行われ、かなりの成果を上げていました。「まるもまだ」の落首はそれを皮肉ったものです。つまり、公家たちは幕府の要請によって関東に下向する際にはさかんに「ねえ、ねえ、御願いだから」と居催促をしたらしいのです。「貧乏な私です、まずお金を。金を握らせていただきたい、すぐにも出立しますのに」との意を、洒落者の江戸っ子が若干の艶っぽさも加えて落首にしたもの。

以前にも書いたことですが、我が国には古くから烏澁の文芸、すなわち笑いの文芸という伝統がありました。狂言、狂歌、川柳。そして落語もいれてもいいかもしれません。それに少しワイセツな要素をいれるとさらに面白さもぐんと増します。山崎宗鑑の「犬筑波集」に多く収められている無心連歌はそのいい例ですが、次の歌などはなかなかの傑作だと思うのですが、どうでしょう。

かすみの衣 裾は濡れけり  
佐保姫の 春立ちながら 尿しよをして

これを読んで顔をしかめた人がいます。念のためにいえば女性の方ではありません。貞門俳諧の総帥、松永貞徳その人で

す。社会の良俗を乱すものは許さんとかかりに先の歌を次のように手直ししました。

かすみの衣 裾は濡れけり  
天人や あまくだるらし 春の海  
(新增犬筑波集)

古典的な要素も加わって確かに優美な内容となりましたが、残念ながら大口を開けて笑い合う健康さが減じたと筆者は感じます。

連歌、俳諧も含めて「みな人の教誡(教え戒めること)のはし(きつかけ)となるやう心得よ」と説く貞門俳諧に対して滑稽・機智のさらなる拡大を求めたのが西山宗因の談林派。その談林派から松尾芭蕉が出てくるというのは学校の古典の授業で教える俳句の歴史です。ですから、もともと芭蕉はなかなかよく諧謔を解する人であつたはずなのです。たとえば次の句。

夕顔や 酔うて顔出す 窓の穴  
「続猿蓑」

これはクスッと笑える句です。もちろん「犬筑波集」のようなやや下品な笑いではありません。

夏の宵、昼間から飲んだ酒の酔いにかせてトイレの小さな窓の穴からひよいと赤い顔を出したら、きまりの悪いことにそこに夕顔がぱつちりと咲いていてこ

ちらを見ていた、というのが句意でしょう。滑稽さと美しさとがバランスよくとれた秀句です。

「夕顔」はもちろん「源氏物語」の「夕顔」を踏まえた言葉ですから、古典的世界の優美さと滑稽味の見事なコラボといえます。

## 五

日本の古典から抜けだして、ここらで西洋の古典、それも古代ギリシア人の墓碑銘から思わず笑ってしまう傑作を二つ。

「殺された男の墓碑銘」

わしを殺しおつた男めが  
己がしわざを隠そうとして  
わしをここに葬つた。

わしに塚を築いてくれたのなら

奴もまた同じ親切に

どうか あずかつて欲しいものだ。

「独り者の墓碑銘」

このわし、タルソス生まれのディオ  
ニシオスは、よわい六十にしてこ  
こに眠つておる。一生の間 つい嫁

ももらわずに。わしの父親もそうし  
てくれりやよかつたものを。

「ギリシア詞華集」沓掛良彦訳より

なかなかギリシア人もやるものでしょう。たぶん架空の人の墓碑銘でしょうが、思わずニヤッと笑ってしまいます。さす

がは悲劇・喜劇を数多くものした人たちと拍手を送りたいほどです。こうした一ひねりした笑いを喜ぶのは古今東西を問うことはありません。烏澁なることは、みな好きなのです。

## 六

さて、あれこれと好き勝手に書いてきましたが、古人のいわく「人生は歩く影法師、あわれな役者にすぎぬ。束の間の舞台の上で動き回ってはみるものの、出番が終われば跡形もない。」だとか。

近ごろ増えてきた知人の葬儀に出るたびに人生のはかなさを痛感します。しかし嘆いても仕方のないこと。今日、生きてあることを喜び、今日のように明日も平安であることを願ひ、大いに嘆き、大いに笑い、そして、出番が終われば舞台のライトが消えると同時に自分もすつと消えていく。見果てぬ夢のような生き方であり、かつ、いささか小市民的な願ひではあります。筆者の理想ではありません。

なお、冒頭に「自選詞華集あれこれ(一)」などと書いてしまいましたが、(一)があれば(二)もあるという保証は何もありません。気まぐれで申し訳ありませんが、悪しからず。

## 【補足】

本文中の芭蕉の句「夕顔や 酔うて顔出す 窓の穴」の解釈で顔を出すのは作者ではないという説があります。つまり、夏の夕暮れ時

散策していた作者は夕顔の花が咲く家を見つめました。「源氏物語」の「夕顔」のイメージをふくらませた作者が見ているとトイレの丸窓から出た顔は酔ったおじさんの赤ら顔。美しい作者の妄想は一瞬にして消し飛んだという解釈です。顔を出すのは作者か夕顔の家の主人か。解釈はお好きにどうぞ。なお、「窓の穴」をトイレの丸窓と解釈しましたが、「穴」をどう見るか、いろいろな見方があることでしょう。これも御随意にということです。

### 【お詫】

「オクラの山たより」二十八回で藤井竹外の詩「花朝下澱江」で題名にある「花朝」を白居易の「琵琶行」からとった語であろうと書いていましたが、読者の方から「花朝月夕」(花のあしたと、月のゆうべ。春の朝と秋の夜の楽しいひとときをいう)の「花朝」から来ているのではないかと、そして、「花朝」とは陰暦二月十五日のこと、「月夕」とは陰暦八月十五日のことを意味するのではないかと、という御指摘がありました。となれば「花朝下澱江」は「二月十五日下澱江」と単純にいったのではなく少ししゃれていったということになります。

かつて旧中国では旧暦二月十五日(または十二日)を「花朝」を「百花生日」といいます。春の花が生まれ出る日」という日とし、当日、婦女子は美しい着物を着て花園に集まり、春の花が咲き乱れている中でチョウチョ取りを競いました。これを「撲蝶云」といいます。美しい風景ですが、この「花朝」の日の「撲蝶云」が白居易の時代にさかのぼっても行われていたかは不明です。「琵琶行」の句は「春江の花朝 秋月の夜」です。「花

朝月夕」の語はこゝが語源か、と思わず誘惑にかられますが確証はありません。

なお、二月十五日が日本人にとっても春の特別な日であったのは次の西行の辞世句からも分かります。

ねがはくば 花のもとにて 春死なむ  
その如月の 望月の頃

(できることならば咲き乱れる満開の桜の下で死にたいものだ。釈迦入滅の如月(二月)の望月「十五日・満月」の頃に。)

西行終焉の地に立てられたという草庵が京都の円山音楽堂のすぐ南にあります。西行庵という小さな庵ですが、昔は良い雰囲気のところでした。最近はどうなっているか。十年以上ほど行っていないので分かりません。

ここまでくると、釈迦涅槃の日である二月十五日と「花朝」の関わり、さらには旧暦二月十五日(新暦では三月十五日か)に桜が咲くのか、とあれこれと疑問がわいてくるのですが、読者の皆さんもいろいろとお考えください。

蛇足ながら中国で「花」という語からイメージされる花は「桜」ではありません。芙蓉・桃・ツツジあたりをイメージされることが多いです。旧暦二月十五日というと桃でしょうか。となれば「撲蝶云」でチョウチョを捕まえるうと群れ遊ぶ少女たちは桃の花が咲きほころぶ中で楽しく遊んでいることとなります。何だか宝塚のレビューを見ているような楽しくも美しい風景が想像されます。



## 我がおくのほそ道の旅 (24)

成瀬和之

「我がおくのほそ道の旅」の連載を終えるにあたって

立石寺から始まった「我がおくのほそ道の旅」は「平泉」の章をもって「完結」しました。

「我がおくのほそ道の旅」は「偶然」から始まりました。二〇一六年の十月、東北の山の秋を満喫しようと、八幡平・八甲田山・蔵王から磐梯へと東北自動車道を友人と車で走っていました。その時、

「ハッ」と気づいたのです。十月八日から体育の日十月十日まで秋の「シルバーク」の三連休だと。それは蔵王・磐梯などの観光地が「人だらけ」であることを意味します。私たちは山の静かな紅葉・黄葉を見に来たのであって、人を見にきたわけではありません。それは私たちの「ポリシー」に反することなので、急遽、磐梯行きは中止して、まだ人が少ないと思われる立石寺(山寺)へ向かうことにしました。

約一〇〇〇段の階段を登った山上にある山寺、そして芭蕉の句「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」に魅せられ、松尾芭蕉と「おくのほそ道」にはまったのです。それは「偶然」のことでしたが、この「山寺」から「我がおくのほそ道の旅」は始まることになったのです。

もちろん、芭蕉の「おくのほそ道」の出発点は江戸深川です。「月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり。」という有名な冒頭文から「はせを」の「おくのほそ道」は始まります。そして、終着点は大垣です。

しかし、「我がおくのほそ道の旅」は、「はせを」が歩いたとおりに行く必要はありません。

ですが、再び「我がおくのほそ道の旅」に出かける時も、芭蕉が「おくのほそ道」で訪れた所へ春夏秋冬の季節にに応じて、あちらこちら訪ねれば良いのですが、最後は「平泉」に行きたいと思っています。

「平泉」で終わるのは、私の「こだわり」であり、「必然」です。前回述べたように「はせを」の「おくのほそ道」の思想・哲学が最も強く現れている章が「平泉」の章だと考えるからです。「戦争から平和へ」、「暗闇」から「光」をめざして歩んでいきたいという気持ちから、私にとつては「必然」だと言うのです。

さあ、これから、それぞれの「おくのほそ道」の旅に出かけましょう。その契機にこの連載がなれば幸いです。長い間、この連載にお付き合いくださり、ありがとうございました。

## 隠された歴史 (5)

満田正賢

歴史から隠された古代年号

皆さんは、日本で初めて用いられた年号(元号)は何だと思われませんか。一般的には初めて建元された年号は「大化」(六四五年)であり、その後中絶を経て「大宝」(七〇二年)から「平成」まで年号(元号)が千三百年以上にわたり連続して続いていると説明されています。但し、続日本紀の原文には「大宝」の時に年号が建元された(元を建てて大宝元年としたまふ)と記されており、正式には「大宝」が最初の年号(元号)であるということになっています。

一方で皆さん「白鳳文化」という言葉はご存じでしょうか。この「白鳳」とは「日本書紀に現れない元号(逸元号や私年号という)の一つである」と説明されています。それは「白鳳文化」を代表する仏像や神社仏閣の由来を説明した多くの「縁起」に「白鳳〇年」という記述が見られるからです。

日本書紀の中には「大化」「白雉」「朱鳥」という三つの「逸元号」が記されていますが、「白雉」と「朱鳥」の間には三十二年間の空白期間があり、「朱鳥」と「大宝」の間には十四年間の空白期間があります。しかし実際には七世紀初頭から七〇一年の「大宝」まで連続する年号(元号)が多くの書物や資料に残っています。今回は従来「逸元号」や「私年号」とい

う表現で説明されてきた古代年号について触れたいと思います。

九州年号と名付けられた古代年号研究の歴史  
江戸時代の国学者鶴峯戊申は、その著「襲国偽僭考」において、七世紀初頭から七〇一年の「大宝」まで連続する別種類の年号が記された「九州年号」という名の古写本を書き写したとしてその年号を記しました。その為、この古代年号は「九州年号」と呼ばれています。古田史学ではこの古代年号の研究が大いに進んでおり、その成果は「失われた倭国年号―古田史学論集第二十集(明石書店)―にまとめられています。

この古代年号は、「二中歴」(平安末鎌倉初期)、「如是院年代記」(十六世紀後半)、「帝王編年記」(十四世紀)、「扶桑略記」(二〇九四年)、「和漢年契」(一七八九年)、「日本帝皇年代記」(年代不詳)などの我が国の事典や年代記の類、更に朝鮮半島で書かれた「海東諸国紀」(一四七一年)やポルトガルの宣教師ジヨアン・ロドリゲスが書いた「日本大文典」などに多少の異同はありますが、まとめられています。

また個々の年号については、多くの古い寺社仏閣の「縁起」の中に残っています。例えば愛媛県在住の古田史学会員・合田洋一氏は、愛媛県だけで「伊豫三嶋縁起」(記された年号名は「端政」「金光」「願禱」「常色」「白鳳」「大長」)、「無量

寺文書」(記された年号名は白鳳)など二十三の書物の中に「九州年号」が残っていることを確認しています。

倭国年号という名称について

古田史学では、従来「九州年号」と言っていたものを「倭国年号」と言い換えています。九州王朝の存在を主張している古田史学の中では「九州年号」という名前でも日本(倭国)全体で使用されていたというイメージが浮かぶのですが、一般的には「九州年号」という呼び名では九州だけで使われていた年号であるという印象を与えるからです。

元号を制定するのは独立した国家(王朝)がもつ特権です。「記紀が隠してきた古代年号」の存在は、近畿天皇家以外に年号(元号)を制定する権威(別王朝)があったことの最大の証拠になっています。そして「九州年号」は九州だけで使用されていた年号(元号)ではないということが、重要なポイントです。「九州年号」は「善光寺文書」(記された年号名は「貴楽」「師安」「金光」「命長」)、「江の島縁起絵巻」(記された年号名は「貴楽」)など全国各地で見つかっています。近畿天皇家の正史である日本書紀(記された年号名は「大化」「白雉」「朱鳥」)や続日本紀(記された年号名は「白鳳」「朱雀」)にも一部が残っています。近畿天皇家の正史にこの年号の成立の経緯が記されていないにもかかわらず、年号のみが記されているということは、この年号(元号)

を制定した権威に近畿天皇家も従っていたということになります。古田史学では、この権威が古代から対外的に日本を代表していた「倭国」そのものであると考えて、この古代年号を「倭国年号」と呼ぶことにしました。

倭国年号の内容

倭国年号はいくつかの書物で整理されていますが、誤植と思われる年号も散見されます。その中で一番正しく整理されていると思われる書物が「二中歴」です。以下「二中歴」に記された年号と改元された年を順番に紹介します。なお、「二中歴」以外の書物(「日本大文典」①)、「如是院年代記」②、「永光寺文書」③、「海東諸国紀」④)にあり誤植と思われる年号も括弧内に記します。

・ 継体 五一七年

\*これは二中歴に記されている年号です。

善記(善化④) 五二二年

\*二中歴にもある年号ですが、二中歴以外の文獻は全て善記が初めて建元された元号であるとされています。

・ 正和(正智③) 五二六年

・ 教到(発到④) 五三一年

・ 僧聴(僧とく①) 五三六年

・ 明要(同要④) 五四一年

・ 貴楽 五五一年

・ 法清(結清④) 五五四年

・ 兄弟 五五八年

・ 蔵知(蔵和④) 五五九年

・ 師安 五六四年

・ 知僧(和僧④) 五六五年

- ・金光 五七〇年
  - ・賢称(賢輔①・賢接④) 五七六年
  - ・鏡当(鏡常①②③) 五八一年
  - ・勝照 五八五年
  - ・端政 五八九年
  - ・告貴(吉貴②③・從貴④) 五九四年
  - ・願轉(願ほう①・煩轉④) 六〇一年
  - ・光元(光こう①・光充②・光永③) 六〇五年
  - ・定居 六一一年
  - ・倭京(和景繩①②景繩③) 六一八年
  - ・仁王(なし②) 六二三年
  - ・聖徳 六二九年
  - ・僧要 六三五年
  - ・命長 六四〇年
  - ・常色(常や①) 六四七年
  - ・白雉(白を①・なし②) 六五二年
  - ③は六五〇年
  - ・白鳳 六六一年
  - ・朱雀 六八四年
  - ・朱鳥(なし①②) 六八六年
  - ・大化(なし①③大和④) 六九五年
  - ②は六八六年
  - ・大長
- \*「二中歴」にはなく、①②六九二年、③六九五年、④六九八年
- ・大宝(なし④) 七〇一年

### 倭国年号の消滅

古田史学の代表的見方では、倭国年号は「二中歴」に正しく記載されており、近畿天皇家が「大宝」を建元した七〇一年に倭国年号が消滅している。すなわち九州王朝と近畿王朝の交代があったとみ

なしています。しかし一方で倭国年号の消滅時期について別の見方をしている会員もいます。

お気付きのように、倭国年号は最後に近づけば近づくほど各書物の記述がバラバラになってきます。特に「二中歴」には倭国年号の最後を知る上で非常に重要な年号である「大長」が記載されていません。実はこの「大長」に関しては全国に様々な記述が残っています。例えば、伊豫三嶋縁起」には、「大化」が七〇四年まで続きその後「大長」が七二二年まで続いた後消滅したと記されているのです。

「二中歴」は、鎌倉時代初期に成立したとされる事典であり、その内容は平安時代後期に成立した「掌中歴」と「懐中歴」の内容をあわせて編集したものとされています。「二中歴」の原文には、「大宝」以降は史書に記載されている」と読み取れる註釈がありますが、「二中歴」は年号の連続性を重視した為、あえて「大長」を除外したのではないかと思われるます。実際には「倭国(九州)年号は七〇一年以降も「大長」として継続しており、私自身は「大宝」の建元によって九州王朝から近畿王朝に変わったのではないかと考えています。

### 倭姫王と大宮姫説話

天智(中大兄)の皇后となった「倭姫王(やまとひめ)」について古田史学の会・会員の西村秀己氏が実に興味深い考察を行っています。

中大兄は斉明崩御のあとすぐには即位せず、実に七年間も摂政として政治を行ったことになっています。天智七年(六八八年)になってやっと即位し、この時に初めて皇后を立てます。皇后となった「倭姫王」は古人大兄皇子の娘であると日本書紀に記されていますが、この記述には大きな疑問があります。古人大兄皇子は舒明と蘇我馬子の娘・法堤郎媛(ほてのいらつめ)の子であり天智(中大兄)の異母兄弟ですが、孝徳元年九月に謀反の疑いがあるとして中大兄に惨殺されているのです。その時に「その妃、妾は自経して死んだ」と日本書紀に記されています。仮にその娘が生き残っていたとしても、天智(中大兄)の皇后となる資格を持った女性ではない。しかも天智崩御の際に、大海人皇子(後の天武)は「天下は挙げて皇后にさづけ、大友皇子を皇太子に立てるよう」とまで進言しています。この天智の皇后「倭姫王」と「謀反をおこした古人大兄皇子の娘」とはどういうイメージが合いません。

ところで天智即位の二年後の六七〇年に、倭国から日本国に国名が変更されたという記事が「三国史記・新羅本記」に記されています。国の呼び名を変えたという記事は日本書紀にはありません。西村氏は「倭姫王」は倭国(九州王朝)の女王であり、倭国(九州王朝)の女王と婚姻することによって天智は「倭国王」たる資格を得て、国名を新しく「日本」に変えたのではないかと考察しています。実

に見事な推理だと私は考えています。

日本書紀には天武即位後の「倭姫王」の消息は記されていません。しかし、鹿兒島に、倭姫王のその後の物語ではないかと思われる「大宮姫伝説」という伝説が残っています。(開聞古事縁起など鹿兒島県各地に伝わっています。)

以下は古田史学の会・代表の古賀達也氏がまとめた「大宮姫伝説」の概要です。「孝徳天皇の白雉元年庚戌の時、開聞岳の麓で鹿が美しい姫を産んだ。その姫は二歳の時入京し、十三歳で天智天皇の妃となったが、訳あって都を追われ開聞岳に帰って来た。その後、天智十年辛未の年、天智天皇が姫を追ってこの地に来られ、天智天皇は慶雲二年に亡くなられた。年齢は七十九歳であったと言う。その天皇の後を追うようにして大宮姫は和銅元年に五十九歳で亡くなられた。」

和銅元年というのは七〇八年です。「大宮姫伝説」は様々なフィクションに包まれており、真実の姿は分かりませんが、都を追われた「倭姫王」が鹿兒島に逃れて、倭国(九州王朝)の最後の女王として年号の「改元」を続けた。そして「倭姫王」大宮姫」を信奉する人々が伊予などにおいて「倭国(九州)年号」を使い続けた。そして「倭姫王」の崩御の四年後に「倭国(九州)年号」も自然消滅した。」そのような歴史が想像できます。

以上

## 孫ウオツチング (26)

福田 圭

息子の転職・引越し、私の病気などの影響で「孫ウオツチング」は、お休みしていましたが、再開します。

二月一六日に鳥取県倉吉市へ「孫ウオツチング」に行きました。

光君（ペンネーム、三歳五か月）と葵君（ペンネーム、一歳七ヶ月）は一年近く見ないうちに、二人とも抱くとずしんと重くなっていました。太ももがはち切れんばかりに太く、美味しそうな「ボンレスハム」のようです。光君は語彙が増え、センテンスのある文章で、たくさんしゃべります。葵君も歩けるようになり、小さな靴が可愛いです。「〇〇葵君」と呼びかけると「ハイ」とばかりに手をあげます。光君は、一年前はなんでも「自分でする」と自分でできていたのに、競争相手の弟の出現で、「赤ちゃん返り」して、お父さんに、すぐ「抱っこ」と言っていて、歩こうとしません。まだ、おむつが取れず、歯医者さんの健診は口をつぐんで拒否する「強者」です。全写真真を撮ろうとすると、逃げ出して撮らせてくれません。しつかり、「反抗期」を演じています。

すぐ近くに山があり、川もあるので、子どもが育つには良い環境です。しかし、ご多分に漏れず、お父さんのケータイで、ゲームをしたがりです。飽きたらお父さんに返してくれるから、まだ「まし」か

もしれませんが。

広々とした鳥取県から電車で神戸辺りまで帰って来ると、山と海の間ビルディングが立ち並び、「息が詰まる」ような感覚に襲われます。時々山陰の空気が吸いたいです。

これから、一と月か二月に一度ぐらい「孫ウオツチング」ができると嬉しいのですが…。

### 編集後記

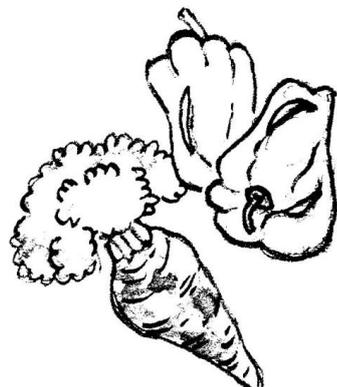
誰しも悩みを持っている。その最たるものは金である。貧乏な者は、どこからか金が落ちてこないかウロチョロし、金持ちは、持っている金が誰かに盗られないかと心配する。金はあるような家には無くて貧乏くさい家にあつたりする。立派そうに見える家には意外と余裕がなく、古ぼけた家に金が眠っていたりする。

超低金利の今、預金するよりタンス預金をしている年寄りが多いに違いない。家族の者にも分らぬように隠しているから、認知症や突然死などにあえば霧散してしまう可能性がある。

我が家でも婆さんが認知症になった時に、通帳や印鑑などが分からず困った。金融機関から送られてくるお知らせで分かったこともある。死ぬまで金を息子らに渡してはいけない、と言う婆さんたちが多いが、適度な時期に渡したほうが良いと思うのだが、息子たちが信用できないとあれば仕方がない。確かに、親のことより遺産相続の金に目が行くのは人の常ではある。

(嘉)

MEMO



朝がくると

地球の、というか、日本の子どもたちは毎日大変な思いをして学校に通っているんだね。そう思ったのは、昨日の午後のことだ。

住まいの穴から頭を出し目の前を通る魚を食ってやろうと待ち構えていたら、授業参観を終わって家に帰る途中らしい親子の会話が耳に入ってきた。

「最後に三年二組の皆で誦んじた詩はよかったね」

と母親が言った。男の子は、「あの詩を習うまでそんなこと考えたこともなかったけどね」

などと言いながら、再びその詩を暗唱しはじめた。「まど・みちお」という詩人が作った「朝がくると」という詩であった。

朝がくると

まど・みちお

朝がくると とび起きて

ぼくが作ったのでもない

水道で 顔をあらうと

ぼくが作ったのでもない

洋服を きて

ぼくが作ったのでもない

ごはんを  
むしゃむしゃたべる  
それから

ぼくが作ったのでもない  
本やノートを

ぼくが作ったのでもない  
ランドセルに つめて  
せなかに しよって

さて  
ぼくが作ったのでもない  
靴を はくと

たったか たったか  
でかけていく  
ぼくが作ったのでもない

道路を  
ぼくが作ったのでもない  
学校へと

ああ なんのために  
いまに

おとなになったなら  
ぼくだって ぼくだって  
なにかを 作ることが  
できるように なるために

人は、何かの拍子に、気づきもせず考えもしなかったことに思いが至ることがあるという。この詩を始めて読んで小学生は何を思うだろう。人ごとながら、そんなことを思

った午後のひとときであった。

それにしてもこの小学生たちに、「君たちは、『おとなになったら』

ではなくて、今だつてとても大切なものを作っているよ。それは何だと思ふ」などという質問は、やはりしないほうがいいのじゃないか。

もうひとつ。この詩人にはこんな詩もある。

いちばんぼし

まど・みちお

いちばんぼしが だた

うちゅうの

目のようだ

ああ  
うちゅうが  
ぼくを みている

この詩をばあさんが読んでくれたとき、私は、一番星とはどんな星なのか。水の中から飛び出して一度見たいものだと思つたものだよ。

もう遠い昔のことだ。

俳句

土田 裕

軒先の雀ふくらむ余寒かな

上枝より轉り降らす大樹かな

堰を越す水春先に輝けり

さながらに古武士の風情鉢の梅

磯の香を二つ折りにし干し若布

影山 武司

浅葱色のトートを肩に春立つ日

二人目は男の子らしきや春一番

春浅し白波寄する御用邸

春の日を竹に編み込む沼津垣

薄紅梅ほどよき香り風にのせ

海鳴りの風に吹かるる梅真白

強東風や根上りの松地を掴み

水温むとろりと揺るる沼の昼

暮れかかる参道ほのと春の燭

甘き香を鞆にバレンタインの日